能序破急事

花伝に大かた見えたれども、なをなをくわしく心得べき条条あり。まづ、一さいの事に序・破・急あれば、これを定むること、これわ次第次第なり。

序といっぱ、初めなれば、本の義なり。さるほどに、正しく、面なる姿なり。申楽も、脇の能、序なり。直なる能の、さのみに細かになく、祝言なるが、正しく下りたるかかりなるべし。態はただ歌舞ばかりなるべし。歌舞わこの道の本体なるべし。されば、歌舞を以て、序の能とすべし。二番目の能わ、脇の申楽に変りたる風情の、本説正しくて、強強としたらんが、しとやかならんをすべし。これわ、脇の能に変りたる風情なれども、いまださのみに細かにわなく、手を砕く時分にてなければ、これもまだ序の分なり。

三番目より、破にわなるべし。破と申は、「やぶる」と書けり。これわ、序の、本風にて直に正しき体を、細かなる重え移しあらわす義なり。さるほどに、三番目の能をば、細かに手の入りて、物まねのあらん風体なるべし。その日の肝要の能なるべし。四番目わ、義理能なんどの、問答・言葉詰めにて事をなす能の風体、またわ泣き申楽なんど、ことにことによかるべし。四五番目までも、いまだ破の内なるべし。

急と申は、挙句の義なり。これわ、その日の名残なれば、限りの風体なり。破と申は、序を破りて、細かに色色を尽くして、くわしく事をあらわす姿なり。急と申は、またその破を尽くすところの、名残の一体なり。さるほどに、急わ、揉み寄せて、乱舞またわはたらきの風体、目を驚かす気色なるべし。揉むと申すは、この時分の体なり。

をよそ、昔わ、能数、四五番にわ過ぎず。さるほどに、五番目わかならず急なりしかども、当時わ、けしからず能数多ければ、早く急になりてわ、急が久しくて、能悪かるべし。能わ、破にて久しかるべし。破にて色色を尽くして、急わ、いかにもただ一きりなるべし。

ただし、貴人の御意によりて仕る能わ、次第不同なれば、かねての宛てがいにわ変るべし。それにつけても、能を心得て、いまだ末あるべき能にわ、たとい、急なる能を御意によりてするとも、心中に控えて、身七分動に心十分動、身七分動云事あり心得て、なを奥を残すやうにすべし。

ここに大事あり。自然、能をする内に、はや破・急の時分になりて、貴人の御後来に御入りあることあり。それわ、はや申楽わ急に及べども、貴人の御心わいまだ序なり。さるほどに、序の御心にて急なる能を御覧ずれば、すべて御意に合わず。結句、先に見つる人人も、貴人の御座より、皆皆機を静めて、座敷あらぬ体になりて、諸人の心も、座敷も、また序になる気色あり。この時節の能、さらに出で来ず。さるほどに、また序になりかえりて能をすべきかなれども、それもまた、なにとやらん能悪し。一大事なり。かやうならん時をば、心得て、破なる能のよからんを、心を少し序になして、しとやかにして、上意を取るべし。かやうに、貴人の御心を取り動かして、また座敷を、破・急に、にこにことしなすやうに、故実を以てすべし。たとい、かやうに心を入れてするとも、十分にわあるべからず。

また、自然、期せざる御会の申楽ありて、大御酒の御時分なんどに、にわかに召されて能のあることあるべし。これわまた、御座敷ははや急なり。仕るべき能わ序なり。これまたー大事なり。かやうならん時の申楽をば、序を仕らん内にて、少し心を破・急に持ちて、さのみにねやさで、軽軽と機を持ちて、破・急え早く移るやうに、能をすべし。これわ、能の故実よくわ、大事なれども、能よく出で来ることあるべし。先の、貴人の御後来の御座敷の能、出で来んことは、左右なくあるべからず。一大事なり。

また、酒盛なんども、同じ心得場なり。「はや酒盛あるべし」とて、かねてより心得て、

扇拍子より、祝言の音曲、次第次第の謡、立ちはたらきの分わ、心得の内なれば、用意のままなるべし。自然、御後来の御座敷あらん時は、先の心根を持ちて、急を少し序になして、故実を以て仕るべし。また、御座敷の急に参じたらん時にわ、また先の故実を以て、序の心を少し急に持ちて仕るべし。

しかれば、序破急の心得、大綱の申楽より初めて、酒盛、またわかりそめの音曲の座敷までも、次第次第を心得べし。

抜書一ヶ条分　已上。

此本書、花習内、題目六ヶ条、事書八ヶ条也。此序破急段、事書内一ヶ条なり。外見不可有。秘伝秘伝。

応永廿五年二月十七日